



大瀬さん (沼津市大瀬)



オテンノウサン (三島市大場)

富士・沼津・三島市博物館共同企画展

海 サト 山 マチ の 民間信仰



十二日講 (富士市西柏原新田)



初午 (三島市玉沢)

日本人は、様々な地域で様々な暮らしを営んでいます。日々の生活において人々がいちばんに願うことは、生活の向上と安定、安全で幸せな暮らしではないでしょうか。古来より私たちの祖先は生活の安全保障を得るために、神や仏を信仰し、地域独自の信仰スタイルで様々な願いをかけてきました。海・サト・山・マチとは富士市・沼津市・三島市域をあらわすこととし、暮らしのなかの素朴な庶民の信仰について展示を試みました。それぞれの地域社会で生まれ培われた信仰、素朴な願いが託された神々を紹介します。

平成10年10月3日(土)～11月15日(日)

平成10年11月23日(月)～平成11年1月31日(日)

平成11年2月9日(火)～5月30日(日)

三島市郷土資料館

富士市立博物館

沼津市歴史民俗資料館

海

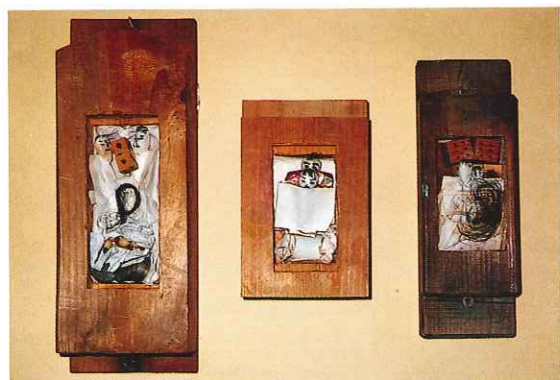
漁民の信仰

遠洋漁業にしる地先の漁業にしる、漁師が最も気にかけるのは天候です。およそ1年を単位とする農作業のように、長期的な予想のもとでの作業計画はたてられず、どちらかといえば短期的な、あるいは短時間的な予想による作業が漁師の生業であるとも言えます。

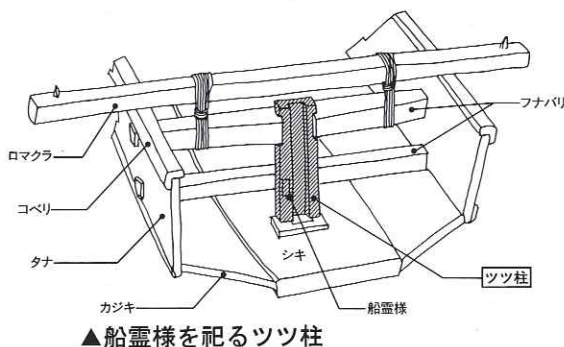
そうした中でムラ単位の信仰を行うわけですが、そこにはムラ全体が関わる氏神的な祭りや網組などでまとまった集団による祭りなどが見られます。さらに個々の漁師がイエ単位で行う個別的な祭りも含まれます。

また、「板子一枚下は地獄」といわれるように、漁民の海上での作業は、いつも地獄と背中合わせの状態でした。それからの回避と安全を願って、船中には船霊（ふなだま）様が祀られました。

古くは船大工が船を完成する折に、帆柱のツツに穴を穿ち、そこに人形やサイコロ、お金、船主夫婦の髪の毛や奥さんの髪の毛、さらには五穀など納めしっかり蓋をしました。



▲船霊様



▲船霊様を祀るツツ柱

エビスは水の世界から多くのご利益をもたらす漂着神として漁民の信仰を集めました。

海上の漁師が自らの位置を知るには、周辺の山々を頼りとする場合が多く、沖合い漁業などでも、山を特定してその変化や他の山との重なり具合でそれを確認しています。そんなことによるのかも知れませんが、内浦や静浦では漁師が山の神をよく祀っています。

また、船は海と陸を結ぶ存在として、海からやってきたエビス神などを陸に繋げる役目を負っているとも思えます。さらに夫の出漁中の安全を祈願して、妻たちが山に籠もったり、講を組織して神を祀るなどの信仰も見られます。

他には大漁を祈願して神社に絵馬を奉納したり、大漁となると神社にお礼参りをしたりします。そしてジئمさんの祭典やお天王さんでも大漁祈願の祭りをおさめています。



▲漁家の妻たちの講（絵馬）



▲三津八坂神社のオテンノウサン

サト



▲お田打ち（三嶋大社）



▲マンガライのオレイダイモク
（富士市本市場新田）



▲中島のオテンノウサン神輿



▲蔡倫講の掛軸

たう お田打ち（三島市、三嶋大社）

正月7日に行われる三嶋大社の「お田打ち」は三島や、田方・駿東郡下の農民達が米の豊作を祈願するお祭りとして知られています。穂長、福太郎という二人の主役が掛け合いで行う狂言形式の名乗りが始まり、田回り、水口開き、代かき、刈敷撒踏み、種祭、種蒔、苗代見、鳥追の順に稲の生育に合わせた所作が演じられ、最後に打ち鳴らす太鼓の音を雷鳴に見立て、穂長、福太郎をはじめ田主や巫女などの一同が田の四方を回り、夕立に遭う所作をして終了します。この後「福餅」や「福種」が撒かれます。

マンガライのオレイダイモク（富士市本市場新田）

田植えが終わったあと、6月30日あるいは7月1日をマンガライ（馬鋤洗い）といい、田植えまでに使用した農具をきれいに洗って感謝の意を示します。この日は村中で農休みになります。

富士市本市場新田では、その夜、氏神である稲荷神社に各家の女達が集まり、オレイダイモク（お礼題目）を唱えます。田植えが無事に済んだことへの感謝と、豊作を願うものです。

オテンノウサン（三島市中郷地域）

田植えが済み、マンガアライを済ませて農具を納屋に収めると稲作農家は「ほっと」一息がつける時を迎えます。三島市南部の中郷地区に伝わるオテンノウサンのお祭りは、この時期（7月初旬）、同地区一帯で一斉に行われます。

中郷地区は水田地帯。御輿の中のオテンノウサンが、集落内をくまなく巡り、この時期に蔓延する恐れのある汚れ（疫病や稲の害虫）を清めます。沿道にはムギカラを焚くパチパチという音と炎が勢よく、縄で縛られ、若い衆に担がれたあばれ御輿を煽ります。京都八坂神社、愛知県津島神社などの祭りが形式を変えて地方に定着した祭りです。

さいりん 蔡倫講（富士川町北松野）

江戸時代の中ごろ、興津川、庵原川、芝川、富士川などの川沿いで漉かれていた駿河半紙は、江戸を中心に全国に出回っていました。

富士川流域の北松野（富士川町）には、戦前100軒余りの紙漉き場がありましたが、戦後は10軒ほどに減りました。この地域で紙漉きを営む家々では蔡倫講と呼ばれる講が、当番の家で行われていました。紙の製法を大成したといわれる古代中国の人物蔡倫を紙漉きの祖として描いた掛軸を祀り、講を開くものです。講の当番は輪番制で、蔡倫講の掛軸や書類を管理していました。

サト



▲お田打ち（三嶋大社）

お田打ち（三島市、三嶋大社）

正月7日に行われる三嶋大社の「お田打ち」は三島や、田方・駿東郡下の農民達が米の豊作を祈願するお祭りとして知られています。穂長、福太郎という二人の主役が掛け合いで行う狂言形式の名乗りに始まり、田回り、水口開き、代かき、刈敷撒踏み、種祭、種蒔、苗代見、鳥追の順に稲の生育に合わせた所作が演じられ、最後に打ち鳴らす太鼓の音を雷鳴に見立て、穂長、福太郎をはじめ田主や巫女などの一同が田の四方を回り、夕立に遭う所作をして終了します。この後「福餅」や「福種」が撒かれます。



▲マンガライのオレイダイモク（富士市本市場新田）

マンガライのオレイダイモク（富士市本市場新田）

田植えが終わったあと、6月30日あるいは7月1日をマンガライ（馬鋤洗い）といい、田植えまでに使用した農具をきれいに洗って感謝の意を示します。この日は村中で農休みになります。

富士市本市場新田では、その夜、氏神である稲荷神社に各家の女達が集まり、オレイダイモク（お礼題目）を唱えます。田植えが無事に済んだことへの感謝と、豊作を願うものです。



▲中島のオテンノウサン神輿

オテンノウサン（三島市中郷地域）

田植えが済み、マンガアライを済ませて農具を納屋に収めると稲作農家は「ほっと」一息がつける時を迎えます。三島市南部の中郷地区に伝わるオテンノウサンのお祭りは、この時期（7月初旬）、同地区一帯で一斉に行われます。

中郷地区は水田地帯。御輿の中のオテンノウサンが、集落内をくまなく巡り、この時期に蔓延する恐れのある汚れ（疫病や稲の害虫）を清めます。沿道にはムギカラを焚くパチパチという音と炎が勢よく、縄で縛られ、若い衆に担がれたあばれ御輿を煽ります。京都八坂神社、愛知県津島神社などの祭りが形式を変えて地方に定着した祭りです。



▲蔡倫講の掛軸

蔡倫講（富士川町北松野）

江戸時代の中ごろ、興津川、庵原川、芝川、富士川などの川沿いで漉かれていた駿河半紙は、江戸を中心に全国に出回っていました。

富士川流域の北松野（富士川町）には、戦前100軒余りの紙漉き場がありましたが、戦後は10軒ほどに減りました。この地域で紙漉きを営む家々では蔡倫講と呼ばれる講が、当番の家で行われていました。紙の製法を大成したといわれる古代中国の人物蔡倫を紙漉きの祖として描いた掛軸を祀り、講を開くものです。講の当番は輪番制で、蔡倫講の掛軸や書類を管理していました。

海

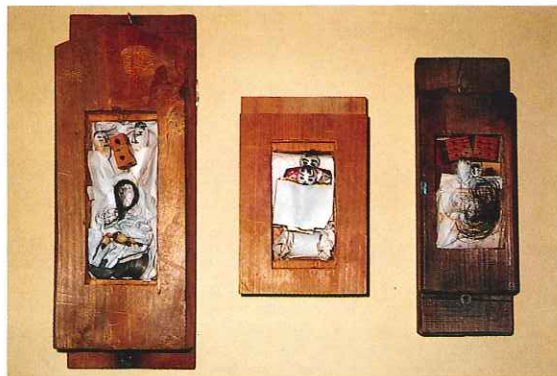
漁民の信仰

遠洋漁業にしる地先の漁業にしる、漁師が最も気にかけるのは天候です。およそ1年を単位とする農作業のように、長期的な予想のもとでの作業計画はたてられず、どちらかといえば短期的な、あるいは短時間的な予想による作業が漁師の生業であるとも言えます。

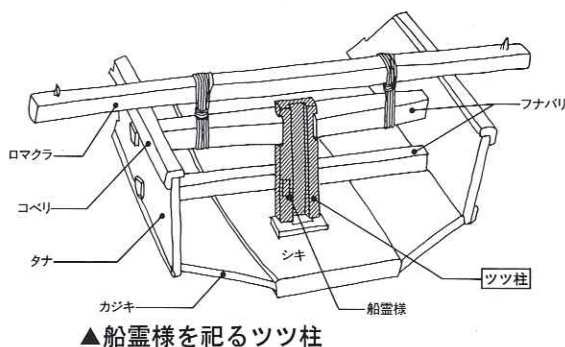
そうした中でムラ単位の信仰を行うわけですが、そこにはムラ全体が関わる氏神的な祭りや網組などでまとまった集団による祭りなどが見られます。さらに個々の漁師がイエ単位で行う個別的な祭りも含まれます。

また、「板子一枚下は地獄」といわれるように、漁民の海上での作業は、いつも地獄と背中合わせの状態でした。それからの回避と安全を願って、船中には船霊（ふなだま）様が祀られました。

古くは船大工が船を完成する折に、帆柱のツツに穴を穿ち、そこに人形やサイコロ、お金、船主夫婦の髪の毛や奥さんの髪の毛、さらには五穀など納めしっかり蓋をしました。



◀ 船霊様



エビスは水の世界から多くのご利益をもたらす漂着神として漁民の信仰を集めました。

海上の漁師が自らの位置を知るには、周辺の山々を頼りとする場合が多く、沖合い漁業などでも、山を特定してその変化や他の山との重なり具合でそれを確認しています。そんなことによるのかも知れませんが、内浦や静浦では漁師が山の神をよく祀っています。

また、船は海と陸を結ぶ存在として、海からやってきたエビス神などを陸に繋げる役目を負っているとも思えます。さらに夫の出漁中の安全を祈願して、妻たちが山に籠もったり、講を組織して神を祀るなどの信仰も見られます。

他には大漁を祈願して神社に絵馬を奉納したり、大漁となると神社にお礼参りをしたりします。そしてジئمさんの祭典やお天王さんでも大漁祈願の祭りをおさめています。



▲ 漁家の妻たちの講（絵馬）



▲ 三津八坂神社のオテンノウサン

マチ

あらたま

新玉稲荷神社（富士市吉原）

新玉稲荷神社は、明治時代には富士市吉原西本町の眺峰館（料理屋）の東隣にありました。かつて宿場町であった吉原には、芸者衆のいる料理屋や旅館が軒を連ね賑わっていました。「新玉さん」と呼ばれ親しまれてきた新玉稲荷神社は特に花柳界からの信仰が厚く、大正年間ごろまで行われていた年2回の祭日には、芸者衆のおどりが華やかに奉納されていたということです。社殿に奉納されていた数々の絵馬からは、吉原周辺にとどまらず広く信仰を集めていたことがうかがえます。

芸者衆の稲荷（三島市北田町、誓願寺・田福寺）

旧二日町（現在の北田町）誓願寺と、向かいの田福寺境内にある稲荷社は、昔、三島に何軒もあった遊廓の芸者さんたちの信仰を集めていたことで知られています。現在、田福寺は道路拡幅工事により稲荷社とともに箱根松並木の方に移転してしまいましたが、「芸者さんたちがお参りした」稲荷の伝承を伝えています。また、誓願寺の稲荷社には、遊廓からの寄付金奉納額が掲げられているなど、かつての縁の深さをしのばせています。三島町らしい稲荷信仰であろうと思われます。



▲ 誓願寺稲荷社

元陣屋の屋敷神

陣屋稲荷（三島市、三島市役所）

三島市役所の場所は、江戸時代、三島代官所が置かれ、「陣屋」と呼ばれていました。ここに屋敷の守り神、通称「陣屋稲荷」があります。稲荷は鬼門を守り、屋敷と家族の安泰の守護神と信じられ、家屋を建て替えても元の位置に必ず鎮座させたものです。二月の初午の日が祭礼日で、生魚や油揚げ、赤飯などを供え、五色の幟に稲荷神名「奉納正一位稲荷大明神」と墨書し、社の両側に立てます。また近所の子供達が幟を持ち寄り、お祀りしている家の稲荷社に奉納します。

職人の守り神様

聖徳太子の「太子堂」（三島市広小路、連馨寺）

連馨寺境内には三島市内の職人達の集まり「太子講」の神様、聖徳太子をお祀りした太子堂が建っています。昔は町には様々な職種の職人さん、大工、石工、金物細工、鍛冶屋、桶屋、竹細工、畳職などが居たものです。そのような職人さん達が年に一度太子堂に集まってはお互いの情報交換を行い、技術の発達をはかったものでした。集まりの際、中央に掲げるのが「聖徳太子像」の軸でした。

新玉稲荷神社奉納絵馬



▶ 陣屋稲荷の初午

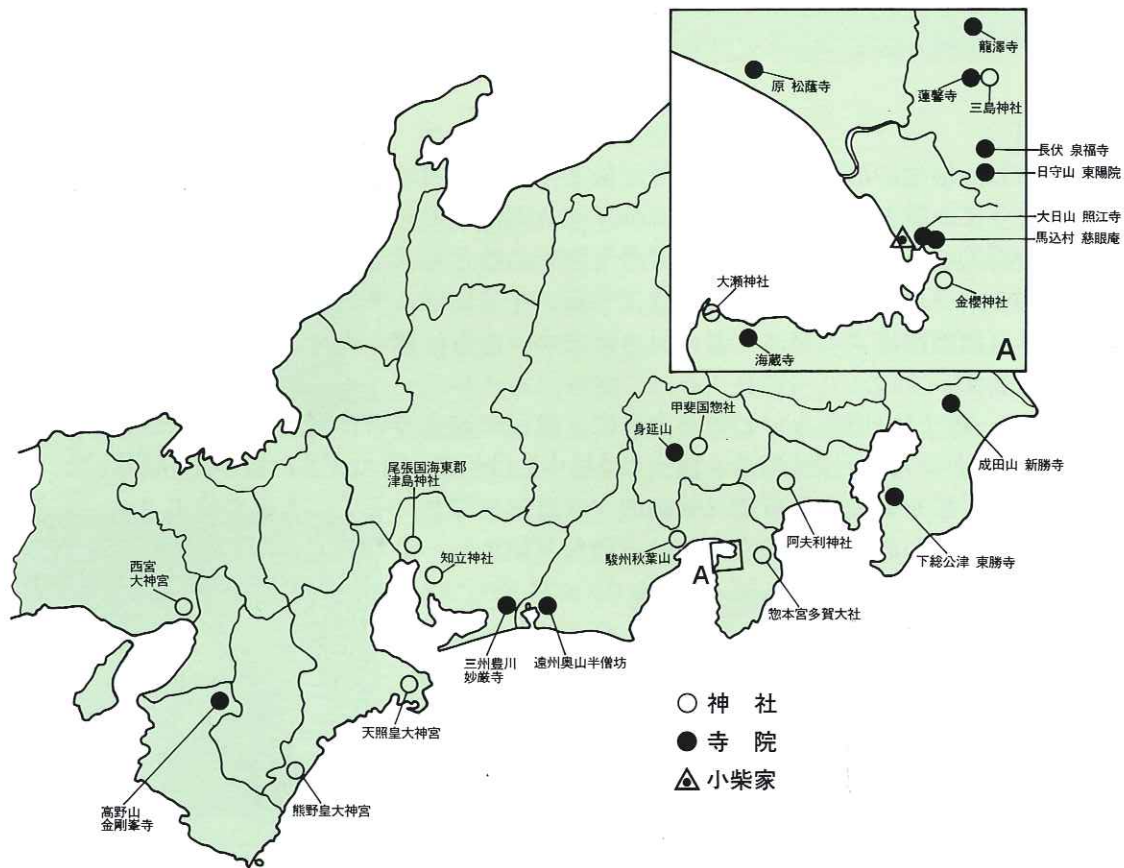


▶ 三島傘職人の太子講掛軸



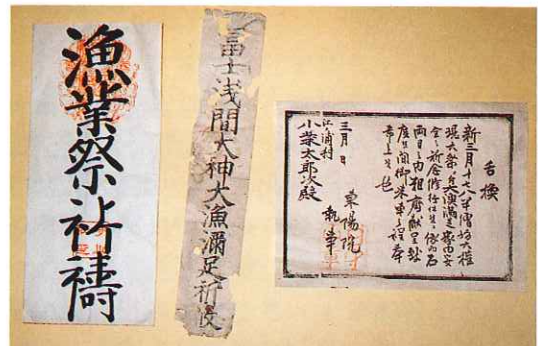
▲ 「太子堂」（連馨寺）

沼津静浦 小柴家の信仰圏



1軒の漁家の信仰はどの程度の範囲に広がっていたのでしょうか。いま沼津市静浦の漁家の残された神札を頼りに、その信仰の広がりを探ってみましょう。

200枚近い主として明治時代の神札には、それぞれ社寺名の刷り込まれたものも何枚か見え、その所在地がはっきり判るものもあります。それを地図上に描いてみると、在地の静岡県東部地区が38.5%と最も多く、最も遠方では但馬国の西宮大神宮のものも含まれ、東では上総の成田山のものも含まれています。



三島佐野 勝俣家の信仰圏



◀ 御年徳八将神 (京都妙心寺)



◀ 出雲大社 天王尊像



◀ 甲州御嶽山 大黒天



◀ 西宮大神

伊豆佐野の勝俣家は江戸時代に同地で長く名主役を務めてきた家柄で、同家には古文書や書籍が多く継承されています。特に幕末から明治期にかけての当主、勝俣猶右衛門父子（花岳・連水）は俳句をたしなむ文人で、当時の地方俳諧の中心人物として活躍をしていました。同家の数多くの資料から、当時、もの参りの旅に出かけて求めたと思われる各地の社寺のお札類を集めて、勝俣家の民間信仰の実態を整理してみました。信仰範囲は西国から関東まで極めて広域にわたり、信仰の種類も家内安全、病気平癒から女性の安産祈願等まで、ありとあらゆる信仰に亘っています。また、求めたお札類は表装を施し、床の間などに懸けて祀ったものと思われ、軸や紐などに使用した痕跡が顕著に残っています。地図は残された護符類から勝俣家の信仰範囲を類推したものです。

